

群 教 七	G09 - 02
	平 23. 243集

中 1 英語においてコミュニケーション能力の 基礎を育成する指導の工夫

——小学校外国語活動を生かした「Jump Up Card」の
活用を通して——

長期研修員 星野 佐都子

《研究の概要》

本研究は、中学校 1 年の英語学習において、小・中の円滑な接続を図りコミュニケーション能力の基礎を育成することを目指すものである。具体的にはまず小学校外国語活動と中学校で学習する言語材料を体系化した。次に中学校 1 年に視点を当て、「Jump Up Card」を活用し、小学校外国語活動で親しんだ表現を生かし、フォニックスを取り入れた文字と発音の指導、コミュニケーションを意識した文構造の指導と活動場面設定の工夫を行った。

キーワード 【英語—中 中1 小・中の接続 コミュニケーション能力 体系化】

I 主題設定の理由

平成23年度から小学校外国語活動が既に全面実施され、平成24年度からは中学校においても新学習指導要領が全面実施される。中学校外国語の授業は週 3 時間から 4 時間へ時数増となると共に、「聞く」「話す」「読む」「書く」の 4 技能を統合し、活用させた発信力の育成と小・中連携を図った外国語の指導の工夫が求められている。また、群馬県教育振興基本計画(H21～25)においても、小・中の英語教育の連携を図りながら、コミュニケーション能力の向上を目指すことが求められている。

平成10年告示の学習指導要領に基づき、小学校では国際理解教育の一環として様々な英語教育が実施されてきた。群馬県教育委員会の調査(H23)によると、小学校で触れた英語が中学校の英語学習に役立っていると答えた生徒は55%とその割合はあまり高くない。その原因の一つとして、同調査から小学校の外国語活動を踏まえて中学校の英語指導をしている教員は26%と非常に低いことが挙げられる。そこで、全国の小学校99.1%が小学校外国語活動で使用している（「小学校外国語活動に関する調査」週間教育資料）『英語ノート』で扱われている英語表現を見ると、中学校で扱う言語活動の場面と重複するところが多い。このことから『英語ノート』を基に、小・中での学習内容を関連付け体系化をすることは小・中の円滑な接続を意識した指導をしていく上で必要なことである。

小・中の円滑な接続が求められている中、中学校での学習に、つまずきや苦手意識を感じている生徒が多い。そこで小から中への接続期となる中学校 1 年において、小学校で親しんできた英語表現を中学校英語で生かすことは、小学校外国語活動と中学校英語学習の連携に有効であると考えられる。具体的には、中学校で初めて「書くこと」「読むこと」の指導が導入されるのを踏まえ、小学校で親しんできた語彙や表現を振り返り、「聞いて分かる」「言える」表現を中学校での「読むこと」「書くこと」「話すこと」につなげ、徐々に発展的な学習をしていくことで、コミュニケーション能力の基礎を育成したい。

以上のことから、中 1 英語に視点を当て小学校外国語活動を生かした指導を行うことで、小・中連携を図り、コミュニケーション能力の基礎を育成できると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

中 1 英語において、小学校外国語活動で扱った表現を中学校での英語指導と関連付けて体系化し、小学校外国語活動を生かし、発展的な指導を「Jump Up Card」を活用することで、生徒のコミュニケーション能力の基礎を育成することをねらいとする。

Ⅲ 研究の見通し

本研究では、小学校外国語活動で扱った表現と中学校英語の学習内容を体系化したものを基に、中1において小・中の円滑な接続を意識した活動を盛り込んだ「Jump Up Card」を活用した授業をすることで、コミュニケーション能力の基礎の育成について、以下の3つの見通しに沿って見取るものとする。

- 1 コミュニケーションを意識した文構造の導入と、語順を意識した指導をすることで、文構造を理解し、文単位で正しく話したり書いたりすることができるであろう。
- 2 文字と発音の学習にフォニックスを取り入れた指導をすることで、単語を発音できたり正しい綴りで書いたりすることができるであろう。
- 3 英語を使う必然性のある身近な場面を設定し、小学校外国語活動を生かした発展的な指導を図ることで、意欲的にコミュニケーションすることができるであろう。

Ⅳ 研究の内容

1 コミュニケーション能力の基礎とは

小学校外国語活動では「コミュニケーション能力の素地を養うこと」を目標としている。中学校学習指導要領外国語の目標では「コミュニケーション能力の基礎を養うこと」を目標とし、3年間の学習を通して「事実関係や物事について判断したことをもとに自分の考えや意見などを伝え合うこと」ができるようになることが求められている。本研究では小・中の連携を図るために、接続期である中1に視点をあてた。中1におけるコミュニケーション能力の基礎とは「自分の気持ちや身の回りの出来事について伝え合うこと」ができるようになることである。そのためには、小学校外国語活動で養われたコミュニケーションに対する意欲的な態度を生かし、慣れ親しんできた基本的な英語を活用して、コミュニケーションを図ることが有効である。特に中1の英語学習では、文字の導入や文構造の学習が始まる。これらの学習を、小学校外国語活動と円滑に接続させ、英語を使う必然性のある身近な場面を設定していくことにより、コミュニケーションの基礎を育成したい。

2 小学校外国語活動と中学校英語学習の体系化

「外国語活動の手引き」(H23 群馬県教育委員会)によると、「発表することや発音を練習し覚えたりするなどの活動に自信がなく、負担感を感じている中学生が多い」という課題がある。そこで、小学校外国語活動で慣れ親しんできた単語や表現を中学校英語学習で活用することを考えた。小学校外国語活動では多くの学校が『英語ノート』を使っているが、『英語ノート』で扱われている表現は、中学校で扱う言語材料と重複しているものが多い。中学校の教員はこれを踏まえた上で、小学校で慣れ親しんだ英語をさらに伸ばすような指導をする必要がある。そこで『英語ノート』で扱われている英語表現と中学校で学習

する言語材料とを関連付けて体系化(表1)する。これにより英語指導者は生徒にとって親しみのある分かりやすい例文や表現の提示を行うことができ、生徒の英語学習に対する負担感を軽減できると思われる。

表1 「小・中体系化表1」の一部

小学校外国語活動教材『英語ノート』 Lesson 単元名	英語表現 場面	プラン	NEW HORIZON
Lesson 1 世界の「こんにちは」 を知ろう	Hello. How are you ? - I'm fine. / I'm happy (hungry / sleepy).	A	How are you ? - I'm fine thank you. I am Sakura. Nice to meet you.
Lesson 2 ジェスチャーをし よう	My name is Ken. Nice to meet you. あいさつ 自己紹介		1年 Warm-up 1 あいさつ 1年 Unit 1 あいさつ・自己紹介
Lesson 3 数で遊ぼう	How many ? - Two. 世界のジェスチャー	B	How many CDs do you have ? - I have eighty CDs.

3 小学校外国語活動との接続を意識した活動を取り入れた「Jump Up Card」の活用

本研究で提案する「Jump Up Card」は、2で体系化した表をもとに小・中の接続を円滑に学習するためのワークシートである。このワークシートには、各単元で学習する内容について授業のポイントを次の3点にしぼった学習活動ができるようになっている。まず、文構造を学習するために語順を意識させる学習活動、次に文字と発音を結び付けるためにフォニックスを取り入れた学習活動、さらに意欲的にコミュニケーションさせるための学習活動である。

(1) 言葉のやりとりを活用した文構造の導入と、語順を意識した指導

(「Jump Up Card(1)言えるかな確認編 / (2)言えるかな挑戦編 / (3)わかるかな」)

英語と日本語では語順が異なるため、戸惑う生徒が多い。そこで主語や動詞を色付けしたり、語順ボックスで語順を意識させる指導を行っていく（「Jump Up Card(1)(2)」）。その際、生徒は小学校で慣れ親しんだ英語表現を用い、文法的な視点で学習をしていくことで、文の成り立ちを理解・習得し、単語単位の表現から、文単位で話したり書いたりできるようになる。さらに実際のコミュニケーションの中で使えるようになるためには、機械的な繰り返し練習や文法ルールの暗記だけではなく、文法事項の導入時から言葉のやりとりを通して体験的に理解したり、新しい表現を使って慣れたりする必要がある。これらの学習により、文構成の力を付けることができる。

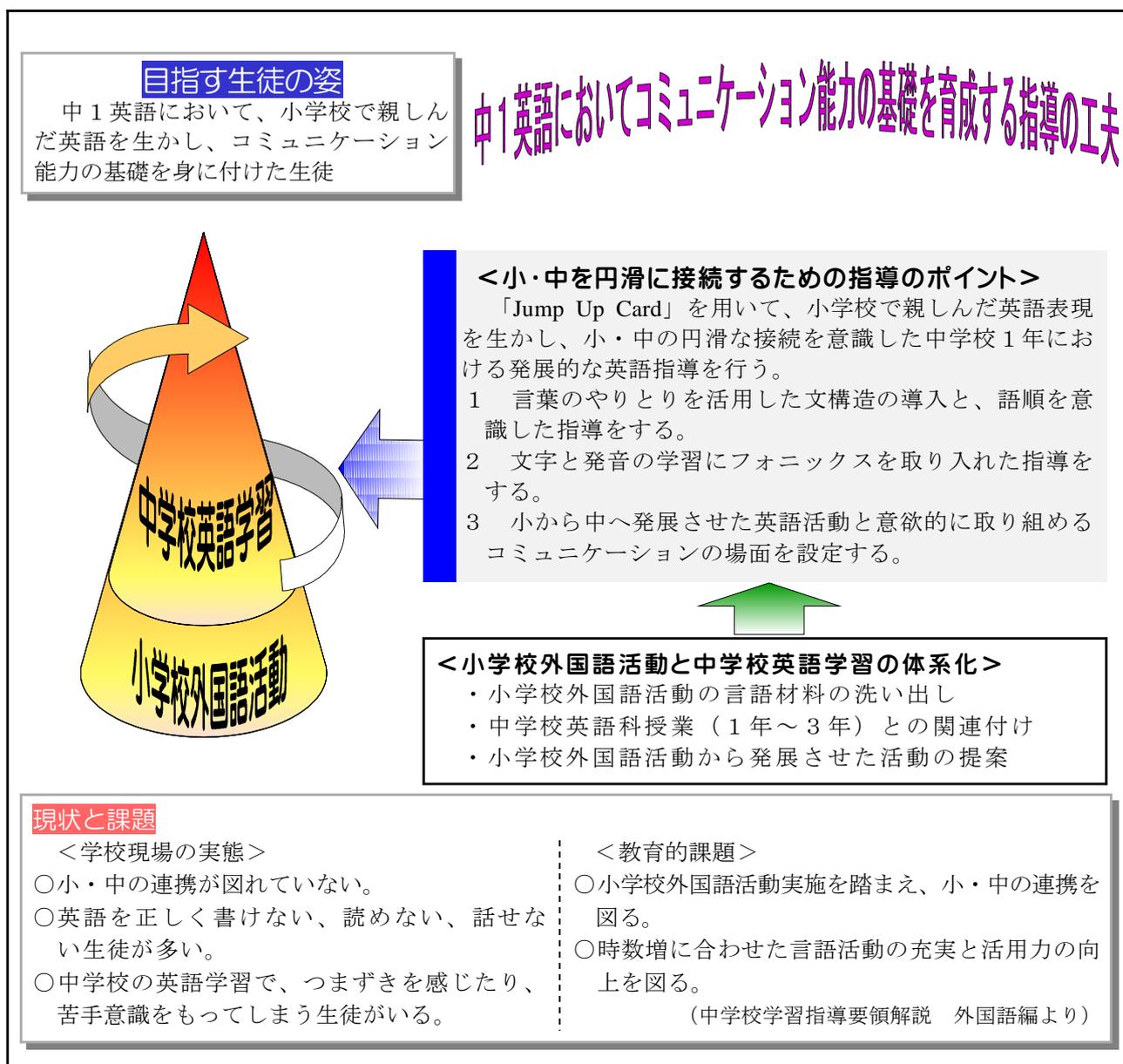


図1 研究構想図

(2) 文字や発音の学習にフォニックスを取り入れた指導

(「Jump Up Card (5)フォニックスで発音しちゃおう」)

フォニックスとは、英語の文字と発音の関係を法則としてまとめたものである。中学校で初めて文字が導入され、生徒は英語を読むことが難しいと感じている。小学校で慣れ親しんできた単語を中心にフォニックスを用いた文字と音声をつなぐルールを学ぶことで、単語の発音を推測し、正しい綴りで書くことができ、最終的には「話す力」「書く力」を付けることができる。

(3) 小学校から中学校へ発展させた英語活動と意欲的に取り組めるコミュニケーション場面の設定

(「Jump Up Card(4)使ってみよう」)

中学校の英語学習で小学校と同じような内容の活動を行っているのは、生徒のコミュニケーションに対する意欲が高まらない。小・中の英語学習の体系化を基に、生徒にとって身近で必然性のある場面を設定することで、生徒は興味をもって意欲的にコミュニケーションに取り組むと考える。さらに小学校での活動を基に、発展的な活動を取り入れ、コミュニケーション能力の基礎を育成することができる。

V 研究の計画と方法

1 研究授業実践の概要

対象	中学校 第1学年
実践期間	平成23年9月29日(木)～10月24(月) 7時間(2クラス)
単元名	「Unit 6 グリーン家の人々」NEW HORIZON English Course 1
授業者	長期研修員 星野 佐都子

2 検証のための生徒群(1年生2クラス64名)

抽出生徒群	事前に行った整序テストの結果
A群50%(32人)	事前整序テストで6問中5～6問正解した生徒
抽出生徒 a	実態：英語の文構造、発音等についてはほぼ理解しコミュニケーションに対する意欲も高い生徒
B群36%(23人)	事前整序テストで6問中3～4問正解した生徒
抽出生徒 b	実態：英語の文構造に対する理解があいまいで、単語や発音についての習得が不十分な生徒
C群14%(9人)	事前整序テストで正解が6問中0～2問だった生徒
抽出生徒 c	実態：英語の文構造に対する理解が乏しく、日本語と同じ語順で英文を構成してしまう。発音についてはほぼ理解しているが、単語の習得は不十分な生徒

3 検証計画

研究仮説	検証の観点	検証の方法
中1英語において、「小・中体系化表」を基に、小学校外国語活動で親しんできた表現を発展させ、小・中の接続を意識した活動を取り入れた「Jump Up Card」を用いることで、コミュニケーション能力の基礎を育成することができるであろう。	中1英語において、コミュニケーション能力の基礎を育成するために、小学校外国語活動との接続を意識した活動の有効性を以下の観点から検証する。	
	○観点1 [文構造の習得] 語順を意識した指導をすることは、正しい語順で話したり、書いたりすることにおいて有効であったか。	・語順整序テスト ・表現テスト
	○観点2 [文字の習得] フォニックスを取り入れて指導することは、文字と発音の関係習得を図り、英語を正しく発音したり、書いたりすることにおいて有効であったか。	・フォニックステスト ・リーディングテスト
	○観点3 [コミュニケーション活動] 小学校で学んだことを用いながら発展的に中学校の学習を進め、身近で必然性のある場面を設定することは、意欲的にコミュニケーションすることに有効であったか。	・自己評価アンケート ・生徒の観察

4 題材の目標及び評価規準

目標	(1)一般動詞の文において、自分や相手以外の人や物が主語になったときの肯定文、疑問文、否定文の用法について理解することができる。 (2)三人称単数現在形について理解することができる。 (3)友達についてたずねたり、それについて答えたりすることができる。			
	コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての 知識・理解
評価 規準	①間違ふことを恐れずに、既習の表現を使って意欲的に友達とコミュニケーションしている。 ②英語特有の発音に気付き、発音しようとしている。	①主語が三単現の時の一般動詞の肯定文や否定文を使って、友達について紹介することができる。	①グリーン先生の家族紹介を読み取り、教科書に書かれていることを理解できる。 ②友達や先生の話す英語を理解し、友達の紹介文を理解することができる。	①主語が三単現の時の一般動詞の肯定文、疑問文、否定文の用法を理解している。 ②英語の文字と発音の関係を理解している。

5 指導計画(全7時間)

※各評価の観点の名称については、

コミュニケーションへの関心・意欲・態度：ア 外国語表現の能力：イ
外国語理解の能力：ウ 言語や文化についての知識・理解：エ とする。

時	学習活動 □学習のねらい ○学習活動	指導上の留意点	評価規準と 評価の観点 (() 内は評価の観点)
1	<p>□小学校で親しんだ表現を振り返る。 ○「Jump Up Card(1) 言えるかな確認編」で小学校で本単元の学習の見通しをたて、既習事項を振り返る。</p> <p>□文構造を理解する。 ○一般動詞三単現の用法を理解する。</p> <p>□文字と発音の関係を学習する。 ○Unit6(1)の新出単語を学習する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 絵から小学校で扱った英語表現を思い出させる。 チャンツを用い、単語をリズムよく発音させる。 like/want/playについては小学校外国語活動でのQ&Aを使い徐々に表現の幅を広げる。 一般動詞三単現の働きを対話のやりとりから、体験的に気付かせる。 フォニックスを意識させ、文字と発音のルールに気付かせながら、発音させる。 	<p>○「Jump Up Card」(1)を10文以上言える。(エ①)</p> <p>○一般動詞三単現について理解できる。(エ①)</p> <p>○フォニックスを意識しながら発音することができる。(ア②・エ②)</p>
2	<p>□既習の文構造を振り返る ○「Jump Up Card」(1)と(2)6までの基本文を言う。</p> <p>□文構造を理解する。 ○一般動詞三単現の否定文の用法を理解する。</p> <p>□コミュニケーション活動をする。 ○「みんなの紹介できるかなゲーム」をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 主語と動詞の関係に注意させる。 一般動詞三単現の否定文の形を対話のやりとりから体験的に気付かせる。 主語と動詞の関係と語順に注意させる。 	<p>○「Jump Up Card」(1)(2)を12文以上言える。(エ①)</p> <p>○一般動詞三単現の否定文の用法を理解し、正しく活用することができる。(エ①)</p> <p>○友達の紹介文を積極的に正しく言える。(ア①・イ①)</p>
3	<p>□既習の文構造を振り返る。 ○「Jump Up Card」(2)8までの基本文を言う。</p> <p>□文構造を理解する。 ○一般動詞三単現の疑問文の用法を理解する。</p> <p>□本文の内容理解及び文字と発音の関係を学習する。 ○Unit6(1)(2)の新出単語の学習と英問英答により内容理解をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 否定文では動詞が原形になることに注意させる。 一般動詞三単現の疑問文の形を対話のやりとりから体験的に気付かせる。 語順に注意させる。 フォニックスを意識させ、文字と発音のルールに気付かせながら、発音させる。 口頭でのQ&Aを通して本文の内容理解をさせる。 	<p>○「Jump Up Card」(2)を6文以上言える。(エ①)</p> <p>○一般動詞三単現の疑問文の用法を理解できる。(エ①)</p> <p>○フォニックスを意識した発音をすることができる。(ア②・エ②)</p>

4	<ul style="list-style-type: none"> Unit6(1)単語テストをする。 □既習の文構造を振り返る。 ○「Jump Up Card」(2)11までの基本文を言う。 □本文の内容理解と文字と発音の関係を学習する。 ○Unit6(3)の新出単語の学習と英問英答により内容理解をする。 □コミュニケーション活動をする。 ○カードゲーム「Go Fish」をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 疑問文では動詞が原形になることに注意させる。 フォニックスを意識させ、文字と発音のルールに気付かせながら発音させる。 聞くことを中心に本文の内容理解をさせる。 大きな声で、doとdoesを正しく使い分けながら、ゲームに取り組ませる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「Jump Up Card」(2)を9文以上言える。(エ①) ○フォニックスを意識した発音をすることができる。(ア②・エ②) ○doやdoesを用いて意欲的に、ゲームをしている。(ア①・エ①)
5	<ul style="list-style-type: none"> Unit6(2)単語テストをする。 □既習の文構造を振り返る。 ○「Jump Up Card」(1)と(2)15までの基本文を言う。 □文字と発音の関係を学習する。 ・「Jump Up Card(5)フォニックスで発音しちゃおう」で‘ch’と‘th’の発音の学習をする。 □コミュニケーション活動をする。 ○「Jump Up Card(4)使ってみよう」でスキットを作る。 	<ul style="list-style-type: none"> 主語と動詞の関係や語順に注意させる。 フォニックスの文字と発音のルールを基に、未習の語を発音させたりつづりを類推させたりする。 「Jump Up Card」で学習した表現を参考に簡単な対話文を英語で作らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「Jump Up Card」(1)(2)を19文以上言える。(エ①) ○フォニックスを意識した発音をすることができる。(ア②・エ②) ○意見を出し合って、意欲的にスキット作りをしている。(ア①・エ①)
6	<ul style="list-style-type: none"> Unit6(3)単語テストをする。 □既習の文構造を振り返る。 ○「Jump Up Card」(3)わかるかな」で新出文法事項の復習をする。 ・練習問題で三人称単数現在形の用法の理解を深める。 	<ul style="list-style-type: none"> 三人称について、図を用いて理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○三単現の用法を理解できる。(エ①)
7	<ul style="list-style-type: none"> フォニックスの確認テストをする。 ○「Jump Up Card」(1)の語順整序テストをする。 □コミュニケーション活動をする。 ○スキットの発表をする。 □単元の振り返りをする。 「Jump Up Card」表紙のチェック欄を使って、学習内容の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> 聞き手に伝わるように、ジェスチャー、表情、声のトーンなどの表現の工夫をして発表させる。 小学校外国語活動で親しんだ表現を発展させて、コミュニケーションできることを実感させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○聞き手に内容が伝わるように表現を工夫して、意欲的に発表している。(ア①・エ①) ○一般動詞を用いて、自分や相手以外のことについて紹介したり、たずねたりすることができる。(イ①)

VI 研究の結果と考察

1 語順を意識した指導をすることは、正しい語順で話したり、書いたりすることにおいて有効であったか
 (「Jump Up Card (1)言えるかな確認編、(2)言えるかな挑戦編、(3)わかるかな」を活用して)

(1) 語順整序テスト、表現テストの結果から

一般動詞の語順指導については、「Jump Up Cardの (1) 言えるかな確認編 (2) 言えるかな挑戦編」を活用した。ワークシートでは、主語と動詞、疑問文や否定文の構造を視覚的にとらえやすいものにし、毎時間繰り返し発音させることにより語順の定着を図った。語順を意識した指導の有効性を語順整序テストと表現テストにより検証した。まず、語順整序テストで比較すると「Jump Up

Card」で指導後のテストの正答率は、事前に行ったテストに対し、B群、C群について大幅な向上が見られた(図2)。その中で日本語の語順で英文を書いていた生徒も、正しい語順で表すことができた(資料1)。次に表現テストを行った。表現テストは2分以内で絵について口頭で説明するテストである。正しい語順で5文以上表せた生徒は71%いた。また1文以上正しく表現ができた生徒は95%であった(図3)。事前テストの並べ換えが全くできなかつた生徒は4人いたがそのうち2人は表現テストで1~2文言うことができた。抽出生徒の表現テストについても、三単現の's'は欠落しているものの語順は正しく言えた(資料2)。しかし、語順整序テストでは一部正答しているものの、表現テストでは0文だった生徒もいる。原因として、面接形式のテストに緊張し誤答してしまったことが考えられる。

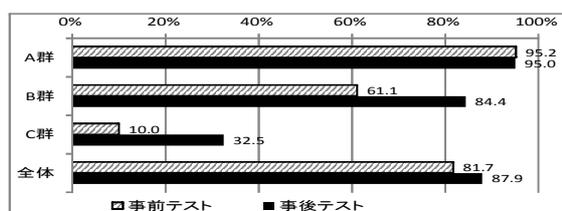


図2 各生徒群の語順整序テストの正解率の差

資料1 B群C群抽出生徒の事前事後の整序テスト解答

抽出生徒	事前テスト解答文	事後テスト解答文
b	You have don't a cat. Do you a car drive ?	You don't have a cat. Does Koji teach Japanese ?
c	you English study. you speak do English	he teaches English. do you speak Japanese ?

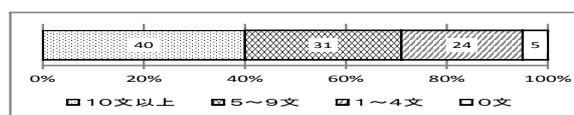


図3 表現テストに答えた文数の割合

以上のことから、「Jump Up Card(1)(2)(3)」を活用した語順を意識した指導を行うことは、語順を定着させる上で概ね有効であると考えられる。

資料2 表現テストの生徒の解答の様子

(実線：正しい文 / 破線：sが欠落しているが語順は正しい文)

生徒b : Mr. Mito ... <u>Mr.Mito has a dog.</u> <u>He has a bike.</u> <u>He play the guitar.</u> <u>Mr. Mito ... doesn't play the trumpet.</u> <u>Ms. Shoya ... Ms. Shoya play basketball.</u> <u>She play the piano.</u> <u>She doesn't play the violin.</u>	生徒c : <u>Mr. Mito likes dogs.</u> <u>Mr. Mito teaches Japanese.</u> <u>Mr. Mito doesn't likes cats.</u> <u>Mr. Mito have a bike.</u> <u>Mr. Mito play the guitar.</u> <u>Ms. Shoya likes P. E.</u> <u>Ms. Shoya doesn't like chicken.</u> <u>Mr. Shoya play ... piano.</u> <u>Mr. ... Ms.Shoya plays basketball.</u> <u>Mr. Mito ... Mr. Mito doesn't like lemons.</u>
---	---

2 フォニックスを取り入れて指導することは、文字と発音の結び付きを図り、英語を正しく発音したり、書いたりすることにおいて有効であったか(「Jump Up Card (5)フォニックスで発音しちゃおう」を活用して)

(1) フォニクステスト、リーディングテストの結果から

本実践ではフォニックスの指導を、新出単語についてはフォニックスを意識した導入、また单元の中で学習する'th'/'ch'の発音については「Jump Up Card(5)」を用いて重点的に行った。单元終了後フォニックスを取り入れた指導の有効性を、フォニクステストとリーディングテストにより検証した。フォニクステストとは発音を聞いて、単語の綴りを書くテストである。新出単語については、各生徒群共に日本語から綴りを書くテストに比べ、フォニクステストの正解率が高くなっている。特にA群、B群の正解率が高く、フォニックスの指導の効果があったと思われる。(図4)。しかしC群についてはあまり正答率が伸びなかった。原因として発音と文字の関係が結び付いていないことが考えられる。また、指導前に比べ'th'と'ch'の発音と綴りの認識については、各群共に正解率が高くなり、特にC群の正解率の伸びが大きい(次項図5)。その理由は、「Jump Up Card(5)」の活用により、文字と発音の関係が結び付いたからである。このことから、発音と文字の関係を意識できることが、単語を書く上で有効

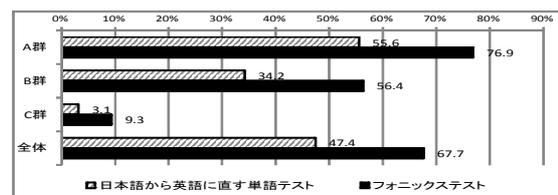


図4 各生徒群の正解率の比較

であることが分かる。リーディングテストは、教科書の音読テストである。新出単語の中で3分の2以上の単語を8割以上の生徒は正しく読んだ(資料3)。wellについては7割近い生徒が正しく読むことができた。これはフォニックスの成果であると思われる。しかし、writeを読めなかったり、herを「ヒヤー」と読んでしまう生徒がいる。このような語についてもフォニックスのルールであるサイレント‘e’やサイレント‘r’の発音についての指導を行っていく必要がある。

(2) 事後アンケートの結果から

9割以上の生徒が「フォニックスが単語を読むこと、書くことに役に立った」と答えており、ほとんどの生徒がフォニックスの有効性を感じていることが分かる(図6)。少数ではあるが、「役に立っていない」と感じている生徒がいるが、本実践では限られた数のフォニックスしか紹介できなかったため、その有効性を感じることができなかったことが原因であると考えられる。フォニックスのルールは多岐にわたるものであり、継続的に指導していくことが必要である。

3 小学校で学んだことを用いながら、身近で必然性のある場面を設定し、中学校での発展的な指導を行うことは、コミュニケーションの意欲を高めることにおいて有効であったか(「Jump Up Card (1)言えるかな確認編、(4)使ってみよう」を活用して)

(1) スキット作りと発表の観察から

今回の発展的なコミュニケーション活動として、スキット作りと発表をペア活動で行った。スキット作りでは、「Jump Up Card(4)使ってみよう」を活用して、「Chris先生が通りかかると…」というテーマで、DoやDoesを使って、相手や第三者のことについてたずね合う対話文を作らせた。スキットの発表では、生徒同士で会話を始め、途中からALTに質問したり、ALTの質問に答えたりした。全員の生徒が5文以上のスキット作成と発表を行うことができた。資料4は生徒の作ったスキットからの抜粋である。発表ではほぼ全員が内容を覚えて、相手の目を見ながら発表できた。「Jump Up Card(1)言えるかな確認編」の小学校外国語活動で親しんだ表現の絵カードを黒板に掲示し、スキット作りに取り組みさせたことで、小学校の外国語活動を思い出し、イメージを膨らませながら、意欲的にスキット作りをすることができた。なおALTからの質問に全員が答えられ、ペアでのやりとりに加え、ALTとのやりとりをクラス全員が興味をもって聞いていた。

資料4 スキット生徒作品

<p>(抽出生徒 a)</p> <p>生徒 A : Hello, Mikure. Hayato likes math.</p> <p>生徒 B : Pardon ?</p> <p>生徒 A : Hayato likes math.</p> <p>生徒 B : Oh, I see. Does he like Japanese ?</p> <p>生徒 A : No, he doesn't.</p> <p>生徒 B : Hi, Chris. What subject do you like ?</p>	<p>(抽出生徒 b)</p> <p>生徒 A : Hello, Maehara. Mr. Mito has a pet.</p> <p>生徒 B : Really ? I don't know. Does he have a dog or a cat ?</p> <p>生徒 A : He has a dog.</p> <p>生徒 B : Hi, Chris. Do you have a pet ?</p>	<p>(抽出生徒 c)</p> <p>生徒 A : Hello, Aki. Ms. Kobayashi likes ARASHI very much.</p> <p>生徒 B : Really ? I don't know. Does she like Ono or Sakurai ?</p> <p>生徒 A : She likes Ono.</p> <p>生徒 B : Hi, Chris. Do you like Arashi ?</p>
--	---	--

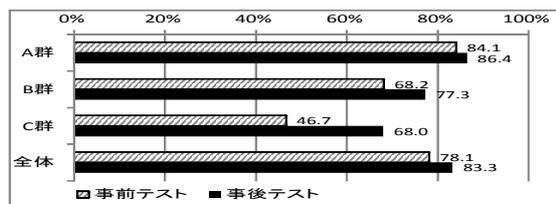


図5 各群生徒の'th/ch'識別テスト事前・事後の正解率の差

資料3 本文に出てくる新出単語を正しく読めた生徒の割合(%)

family (100), sister (100), Lisa (98), Japan (98), live (97), in (97), does (92) teach (88), husband (83), culture (75), well (69), read (64), her (57), write (47)

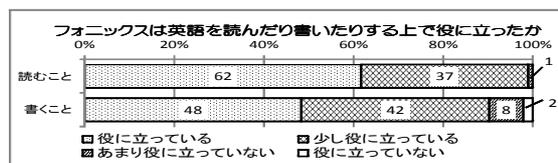


図6 事後アンケートの結果から

(2) アンケートの結果から

英語で表現できたかという問いに対し、96%の生徒が「表現できた」「少し表現できた」と感じている(図7)。資料5は生徒のアンケートの自由記述である。活動後の感想では、8割の生徒が「楽しかった」「またやってみたい」と感じ、発表を通して英語を使うことの楽しさや意欲をもったことが分かる。スキットで自己表現をすることで、英文が自分のものとなり、伝える喜びや分かる喜び、コミュニケーションの喜びを感じたと考えられる。ただし、スキットの内容は、モデルとして提示した例文の主語や目的語を換えただけのものが目立った。また、伝えたいことを英文にする難しさを感じている生徒もいた。初めてのスキット作りであることや1年生ではまだ習得した語彙や表現も少ないため、自分の伝えたいことを自由に表すことができないためと思われる。学年が進むにつれて語彙も増えるので、この活動を繰り返し行うことは生徒が意欲的にコミュニケーション活動に取り組むことに有効であると考えられる。

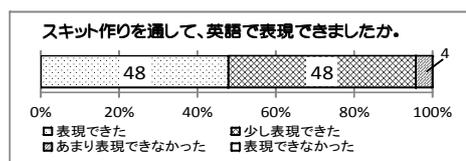


図7 事後アンケートの結果から

資料5 生徒の感想(自由記述形式) ※()内はその生徒が属する生徒群を表す

- ・「Do you〜?」や「Does〜?」を使ったスキット作りは初めてで少し難しくて大変だった。けれど作って発表してみても会話が楽しくてスムーズにいったのでよかった。スキット作りをして勉強になったし、いい経験ができたと思う。(A群)
- ・自分の伝えたいことを英語にするのは少し難しかった。(A群)
- ・けっこう楽しかったです。発表も楽しかったけど、スキットを作るときの楽しさになりました。また機会があれば、スキット作りをして楽しもうと思います。(B群)
- ・僕は英文を見ないで言えたことがうれしかったです。(B群)
- ・とても緊張したけどとても楽しかったです。中学校でこのような楽しい体験ができてとってもうれしかったです。(C群)
- ・今までそんなに言えなかったのが、言えるようになってよかったです。(C群)

4 「Jump Up Card」について

事後アンケート「『Jump Up Card』は英語を勉強する上で役に立ったか」という質問に、96%の生徒が役に立った」「少し役に立った」と答えている(図8)。

その理由は次のとおりである(資料6)。

資料6 事後アンケートの生徒の感想より(一部抜粋)

- ・小学校で学び、積み重ねてきたものを応用して使うことができたのと、単語や並び替えもできるようになったから(A群)
- ・間違いやすい事などを、絵などを使って分かりやすく書いてあったので役に立ちました。書くところなどは、読みながらやっていったので、前よりすくにかけるようになったのでよかったです。(A群)
- ・このカードをチェックしていけば、どこが成長したかやいつチェックが増えたのかわかるのでいいと思いました。(B群)
- ・スキット作りで文章がすくんに思い浮かんで間違えずに書けたから。(B群)
- ・単語が少し読めるようになった(C群)
- ・並べ替える問題では話す順番、書く順番両方役に立った(C群)

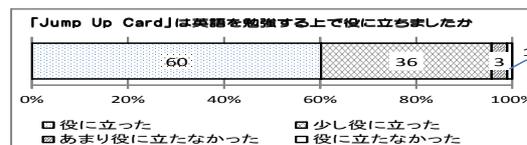


図8 事後アンケートの結果から

以上のことから、「Jump Up Card(2)言えるかな挑戦編」は基本事項や基本構文の定着には効果があると言える。また、それを基に英作文や自己表現をする機会を意図的にもつことにより、定着はより図れるものと思われる。そして、言えた文をチェックしていくことにより課題も明確になり、「Jump Up Card言えるかな(1)確認編・(2)挑戦編」や「Jump Up Card(3)わかるかな」による学習事項のまとめ等を通して主体的に学習を進めることもできたのではないかと考える。また、「あまり役に立たなかった」と答えた生徒は4名でその理由として「文が基本的なことしかなかった、使い方がよく分からず使っていない」ということが挙げられた。基本事項が中心となってしまっていることでA群の生徒にとってはやや物足りない内容であること、また授業や授業以外での活用についての説明が十分ではなかったため、使い方が分かりづらくなってしまったことが原因と考えられる。上位の生徒や授業以外でも発展的な学習につながるように今後は応用的な表現や英語特有の会話表現などを盛り込む必要があるが、「Jump Up Card」は小・中の接続期である中1の英語学習には有効であったと

考える。

Ⅶ 研究のまとめ

1 成果

- 「Jump Up Card(1)(2)(3)」を活用した語順を意識した指導を行うことで、語順についての理解が不十分な生徒が正しい語順で表すことができるようになった。正しい語順で書いたり話したりできることにより、正確な情報をよりたくさん伝えることができ、コミュニケーション能力が高まることに結び付く。
- 「Jump Up Card(5)」を活用したフォニックスの指導により、生徒は文字と発音の関係を学習し、それにより単語を書く力や読む力が高まることが明らかとなった。また事後アンケートから多くの生徒が有用感を感じており、未習の単語も読めるようになり、自発的な学習につながると考える。
- 「Jump Up Card(1)」の小学校外国語活動で経験した表現を提示し、発展的なコミュニケーション活動として行ったスキット作成では、表現のバリエーションをもたせ、スキット作りの難しさを軽減することができた。また発表場面をもつことにより、学習した表現が実践的なコミュニケーションとなり、コミュニケーションの楽しさを味わい意欲が高まることにつながった。
- 小学校外国語活動と中学校で学習する言語材料との体系化の表により、中学校教員は生徒が小学校でどんな言語材料に親しんできたのか分かる。また、小学校外国語活動の内容を知ることにより、中学校での指導に生かすことができる。さらに、小学校教員は小学校外国語活動で学んだことがどのように発展していくのかを知ることができる。

2 課題

- フォニックスのルールは、多岐にわたっている。中学校では学習する内容が多く、フォニックスの指導にかけられる時間は限られている。そこで、1年のアルファベット導入時に集中的に学習したり、新出単語を学習する際など、計画的な指導と内容の精選をしていくことが必要である。
- 「Jump Up Card」は、小学校外国語活動の経験を生かし中学校の英語学習に結び付けていくものである。学年の実態や生徒の発達段階に合わせ、英語への学習意欲が高まるような内容にしていくことが必要である。
- 小・中連携を図るためには、小・中の教員がお互いに授業を見合うなど、相互に中学校外国語科と小学校外国語活動の授業を通して理解を深めることが大切である。組織的な小学校間の交流、中学校とその学区の小学校の教員間の交流や研修会をもち、情報交換をしていくことが有効である。さらに、中学校生徒が小学校に訪問し交流授業を行うことは小・中の連携として有効な手だてとなり得ると考えられる。

<参考文献>

- ・神奈川県立総合教育センター 『小学校英語活動を踏まえた中学校英語の入門期指導』 センター出版(2009)
- ・松川 禮子、大下 邦幸 著 『小学校英語と中学校英語を結ぶ—英語教育における小中連携—』 高陵社書店(2007)
- ・松香 洋子 著 『フォニックスってなんですか?』 松香フォニックス研究所(2008)
(担当指導主事 梶田 利行)